

島根大学研究見本市

吹奏楽曲「パラタクシス II」などを中心とする現代音楽作曲法研究 Contemporary music composition, ex. "Paratxis II" for wind orchestra

研究者紹介

河添 達也(教育学部・教授)
Tatsuya Kawasoi (Professor, Faculty of Education)

概要

私は、新しい語法による作曲を行っています。この「パラタクシス II」という吹奏楽作品の中では、呼吸のようなラインで演奏する管楽器群が互いに重なりあい、言語で言えば、まだ明確な言葉になりきれないゆるい混沌の世界を描こうと試みました。このような言語状態を「パラタクシスの世界」と名づけたアメリカの精神科医サリバンの用いた精神医学用語を、曲の題名としています。

In my piece, I attempted to describe a chaotic world in which language exists only as an amorphous entity and has yet to be formed into a solid structure, by weaving together a number of heterophonic lines effected by deep breathing-like tones of wind instruments. The title of this piece is based on a technical term employed by Harry Stack Sullivan, an American psychiatrist, who refers to this kind of linguistic state as "parataxis."

特色 研究成果 今後の展望

私の音楽作品は、基本的に日本の伝統文化・音楽の概念から非常に強い影響を受けています。しかし、同時にそれと対立する、異なった概念(たとえば西洋音楽)からなる音楽のあり方を1曲の中に同時に紡ぐことによって、両者を相対化し、より豊かな作品として音響化したいと思っています。私にとって両者は同じように美しく、強く情動を喚起させるものです。ですから私は、西洋音楽を主に学んできた現代を生きる日本人作曲家として、異なる音楽概念を1曲の中に取り込み、共存させながら、且つ全体のまとまりを生む、そんなパラドックスに挑戦しようと思っているのです。パラドックスではあるけれども、そういう試みから何か「新しい」語り口が生まれてくるのではないかと。もしかしたらそれは「新しい」のではなく、西洋も東洋もない、それらの表層を越えた、もっと深層の「共通感覚」のようなものを求める試みなのかも知れない、とも思います。そういう試みそのものが、現時点での私なりの「音楽語法」であると思っています。

現代社会は説明的になりすぎているように思えてなりません。何でもわかりやすく、答えを出すことが求められ、表現はどんどん刺激的になっています。そのような状況の中で、現代人の感覚や感性は鈍化してきているのではないかと、耳は音の表層のみを聞き取ることに終始してきてはいないでしょうか？

かつての日本人は松尾芭蕉に代表されるように、普通うるさいと誰もが感じる「蝉の声」という表層の音を通して、その背後に「静けさ」や「死生観」までも聴きとる繊細で豊かな感性を持っていました。その感性が「鈍化」してきている現代だからこそ、あえて確立された語法から離れて作品を発想し、その背後に地下水のように横たわって1つの曲を成立させている(言葉にできない)「コンテキスト」を聞き取ることのできる「耳」=「感性」を取り戻すきっかけとなるような音響作品を紡ぎ続けたい。そんな、おこがましいけれども祈りにも似た想いが、私の創作活動を支える源となっています。(下の写真は自作「パラタクシス II」がクロアチアの音楽祭で演奏された様子)



リハーサルで指揮者と



クロアチア TV 局インタビュー

キーワード

「作曲」「現代音楽」「音楽語法」

リンク

<http://www.edu.shimane-u.ac.jp/staff/staff05.html> (教育学部 HP)